

医心 伝心

麻しんの流行について

富山県医師会監事 植野 喜三

感染力が最強と言われる麻しんについて、平成27年3月27日付でWHO西太平洋地域事務局より、日本で5年間新たな発症がないことから、日本の麻しんは排除状態にあると認定された。と安心した矢先、輸入感染症として、平成30年3月14日から発熱した台湾からの30代の旅行者が、3月17日から3日間沖縄旅行して3月20日に麻しんと診断された。それから、流行が始まり沖縄で99名の方が次々に発症した。その間の3月28日から4月2日まで沖縄旅行をした10代の男性が名古屋に帰って4月11日麻しんと診断され、5月末時点で愛知県では23名。両県で、二次、三次感染と、0歳から50代の人まで発症が相次いだ。6月11日に沖縄県は4週間発症が途絶えたことから、終息宣言を出すに至った。今のところ、重篤な方はおられないようで、ひとまず安心した。

麻しん患者を診断したら、平成10年より「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第12条第1項の規定」に基づき、速やかに都道府県知事に届け出る（血液、尿、咽頭ぬぐい液のうち2点以上を最寄りの保健所に提出）とともに、麻しんの感染力の強さに鑑みた院内感染予防対策を実施することになっている。

麻しんは感染後10～14日の潜伏期を経て(1)カタル期（3日間前後）:38度前後の発熱が続き、小児では鼻水、くしゃみ、咳等の上気道炎症状や、目の充血、目やになどの結膜炎症状、経過中に頬粘膜にコプリック斑（発疹出現後2日目を過ぎるこ

ろには、消失する）が出現する。(2)発疹期（4日間前後）:39度以上の発熱、頭頸部より発疹が出現して全身に広がる。(3)回復期（合わせて7日間程度の発熱後）

カタル期が最も感染力の強い時期だが、この時期に麻しんと診断することが難しいので、知らずに行動してしまい、空気感染（飛沫核の状態で空中を浮遊する）、飛沫感染、接触感染で拡げてしまう。マスクはほぼ無効。更に感染力が強く不顕性感染が殆どないこと。感染可能期間は、発熱等の症状が出現する1日前から、発疹出現後4～5日目くらいまでなので、学校保健安全法施行規則では、解熱後3日間を経過するまで出席停止となっている。

私は全例届出になる前、2回ほど、千葉県、東京都の高校生、中学生に流行したことがあったとき、県内でも小規模な流行があって、1例だけ病院勤務の成人の発疹期の麻しんを診察したが、保健センターに報告しておいた。今回は、富山県内、無事に済んだようだが、ゴールデンウィークの始まる前に39度の発熱に咳を伴い、問診で愛知県に出張してきた。という男性が来院したときは、かなり心配した。1例目の診断は非常に難しい。問診で初めて流行時に、流行地に行ってきたことを告げられたのではたまらない。今回の感染者は、病院内での感染が多いので、流行地に行った人は、電話してから医療機関に受診することを、徹底してもらわなければいけないと思う。